

## ジュディ・オングさん 版画展 「無限Ⅱ 倩玉的版画世界」インタビュー

日本台湾交流協会は、令和5年度の文化事業として、令和5年11月18日から12月17日の期間、台南市美術館主催のジュディ・オングさんの版画展「無限Ⅱ 倩玉的版画世界」を共催します。開催に先駆けて、ジュディさんに、11年ぶりとなる台湾での版画展開催に向けた意気込みや日台関係への想いをインタビューしました。



©SHOJI MOROZUMI

### ジュディ・オングさん略歴

歌手・女優・木版画家

台湾生まれ。3歳で来日し、女優として11歳の時、日米合作映画「大津波」でデビュー。

歌手デビューは16歳、数々のヒットを飛ばし、1979年には「魅せられて」が200万枚の大ヒット、日本レコード大賞他を多数受賞。25歳で始めた木版画はプロフェッショナルとなり、2005年「紅楼依緑」が日展特選を受賞。これまでに14回の日展入選を果たし国内外で個展を開催中。現在、開発途上国の子供たちを支援するワールドビジョン・ジャパンの親善大使の他、ポリオ撲滅大使、日本介助犬協会介助犬サポート大使を務めている。

### ジュディさんと日台交流

——ジュディさんは、昨年（2022）、日本で文化庁長官表彰と外務大臣表彰をダブル受賞されました。特に外務大臣表彰では歌手・女優としてお忙しい日々を過ごされる傍ら、1999年の台湾中部大地震や2011年の東日本大震災の際には多数の慈善活動をされ、木版画を通じて日本の風景美を広く伝えて日台間の文化交流や友好親善の推進、相互理解の促進に大きく貢献されたことが表彰の理由でした。

これまでのご自身の日台交流への取り組みやチャリティー活動を振り返られ、今後の日台交流の展望はどのように描かれ、またどのように参加なさりたいですか？

ジュディ・オングさん 参加の仕方は色々あるかと思いますが、私にとって台湾は生みの親で、日本は育ての親なので、両方の親が仲良くしてくれることが一番幸せであり、そうであってほしいという願いがすごく深いです。大変な時は、お互いに手を差し出して助け合う関係です。阪神大震災の時、台湾から多くの援助が差し伸べられましたし、台湾中部大地震の時は、日本からの支援が沢山届けられました。そして、東日本大震災の時に台湾に助けを求めに行ったら、本当に多くの方が助けに来てくれました。あの時の感覚は、なんと言うのでしょうか、兄弟が大変だ、という感覚だったとみんなが言うのです。大好きな日本が大変だ、と。その気持ちがあのチャリティーに現れていましたね。後日台湾に行きましたら、すごく楽しそうに、嬉しそうに、

「恩返しに来ちゃいました！」という日本の若者にいっぱい会いまして、「あの時はありがとうございました！」ってお礼を言われましてね。私、しどろもどろしちゃいました。

でも、日本と台湾のこの心の交流は、私の母が子供時代に、日本人のお友達と手に手を取って学校に行き一緒に勉強をして、学校が終わってからは一緒に遊んで、という仲良しだった思い出が私たちの年代に伝わって、そこからまた次の世代に上手に繋がっているのですよね。だから、これをこのまま、もっともっと持続させて、この仲良しがいずれは世界平和に繋がっていくようにしたいと。そのお役に立てることが、私が生涯続けていきたいことだと思います。

——元々台湾の方々が抱いていた日本への想いもあったのだと思いますが、ジュディさんが先頭を切ってチャリティーイベントのお声がけをしてくださったからこそ、あれほどの大きな支援活動に繋がったのではないかと感じています。今後もぜひ、日本と台湾の仲良しの度合いを深めていただけるとありがたいと思います。あの時の台湾の方の寄付の仕方は日本人のものとは違いましたね。

ジュディ・オングさん 本当にね、自分のお給料全部寄付してくださったとか。ちっちゃい子ども、何かを買おうと思って貯めていたお金を全部もってきてくれて。企業の人も、「え、こんなに出してくださるの？」っていう感じで、とても嬉しかったです。

私はちょうど版画展が終わったばかりで、作品を全部持って帰ってきていたところだったので、それをチャリティーオークションに持っていこうと思っていましたら、当時の馮寄台駐日代表が、「ほんと？」って聞かれたのです。「持ってきます。売ったら全額寄付しますから」って答えたら、その後、どなたかがとんでもない値段で買ってくださったんです。もちろん、私の作品は寄付をするための1つのきっかけとしてそこに存在しただけだと思うのですが、そうし

た皆さんの心が素晴らしかったですね。

台湾でのチャリティーオークションは2日間で2つ行いましたが、当時、私の部屋は管制塔のようになって、どんどん寄附の電話が入ってきました。中でも、台湾ファストファッションのNET社の黄文貞社長からは、「被災地は寒いから、3万着のフリースを届けたい」とお申し出いただいて、台湾中のショップの店頭で並んでいたものをかき集めて寄付してくださったんです。1つ1つのお店が自分の店にあったフリースを箱詰めして送ってくださったんですよ。

でも、3万着なんて、どうやって東京まで持って行くのか途方に困っていましたが、エバグリーン会の張榮發会長に相談してみようと思いました。それで電話したら、張会長は、「今、日本は大変だから、船を出してあげる」とおっしゃって、コンテナを1つ提供してくれたんです。「じゃあ港まではどうやって運ぼうか」と言ったら、今度は私が親善大使を務めさせていただいている国際協力NGOワールドビジョン・台湾がトラックで何回も何回も運んでくれて。東京でもそれを受けた国際協力NGOワールドビジョン・ジャパンが被災地に運んでくれました。

## 版画展の開催経緯

——さて、そのチャリティーオークションにも出していたジュディさんの木版画ですが、台湾でもとても有名で、2012年に台北の国立国父記念館と高雄の高雄市文化センターで個展を開催された時も大変な話題でした。今回の開催地の台南は、ジュディさんにとって大変ゆかりの深い土地とありますが、どのようなご縁と経緯があって今回の開催が決まったのでしょうか？

ジュディ・オングさん ありがとうございます。私の版画の台湾における師匠であり、お友達でもある廖修平先生から、「ジュディちゃん、あなたの故郷でやらない？」とご提案をいただき、

台南市美術館からお声をかけていただいたのです。台南は私の故郷で、父も母も台南出身です。来年は鄭成功の生誕400年と安平城築城400年ということで、台南の皆様がとても大切にしている年にあたりますが、実は、私の両親の先祖は、鄭成功と一緒に台湾に来たのです。父方は鄭成功の軍医として台湾に入り、ずっと医者の家系でした。母方の先祖は、鄭成功に仕えた武将の一人でした。南京の戦いの時に命を落とし、鄭成功がその孤児たちを「一緒に台湾行こう」と腕に抱えて台湾に連れてきて、鄭家が後の台南「柳営」の領主となりました。母で10代目、私が11代目になります。父の方では17代目です。

そういう訳で、私の版画展が来年の台南400年のイベントみたいになれば一番いいなと思っています。

## ジュディさんと版画の出会い

——台湾で生まれ、日本で育ち、小学生の時に芸能界入りされてから、世界を舞台にずっとお忙しく活躍されているジュディさんですが、日本の木版画に魅せられて、25歳から本格的に木版画に取り組まれているとのこと。当時のジュディさんにとって木版画にはどのような魅力があったのでしょうか？

ジュディ・オングさん 絵は元々好きで、小学校の頃からいっぱい描いていました。水彩をやり、その後油絵を描くうち、友達から「白黒の版画を見に行かない？」と誘われたのです。「白黒の版画」って言われて、とても民芸調のものを想像して行きましたら、それが超モダンな、白いバックに黒いポピーと、黒いバックに白いポピーが対になって掛かっている、まるでハリウッド女優さんのお部屋のソファの後ろに飾ってあるようなモダンな作品だったんです。それにある種のショックというか、感動を受けまして。

その版画を作られたのは、棟方志功先生のお

弟子さんの井上勝江先生だったのですが、私はすぐにその場にいらした井上先生に、「私、版画始めたいんですけど」って言いました。井上先生が、「あら、ジュディ・オングさん？」ってお聞きになるので、「はい！」と答えましたら、「いや、無理よ～」って言われましてね。

彼女はおそらくお芝居して、歌を歌って、司会をして、普通の生活をする時間もないような中でどうやって版画をやるの？っていうお気持ちがあったと思うのですが、でも、そう言われると、余計やりたいじゃないですか。それで家に帰って、兄から板の破片をもらって、小学生の時に使っていた彫刻刀を出してきて椿の絵を描いて。もう見よう見まねで一所懸命彫って、バレンなんかありませんから、スリッパで刷った作品を井上先生の所に持っていきました。そうしたら先生、それを見て、「んーっ」って考えこんじゃって。

その時ちょうど彫刻家の長沼孝三先生がいらして、「勝江ちゃん、その子続きそうじゃない？見てみなよ、あの掘り方。きっと頑固だよ～。」とかおっしゃったんです。それで井上先生から「そうね。それじゃあ、土曜日からいらっしやい。」ってご許可をいただいて始めたのが25歳でした。



©HEEMORY  
椿(小・処女作)



それからは仕事のない土曜日には毎週、先生のところに通って教わりました。絵を描いて、板に反転して、彫って、彫刻刀の使い方を教わりました。作品は小さいものから始めましたが、ある時先生が、「大きいのを、やってみたら」っておっしゃったのです。「やってみなきゃわからない、人生は挑戦、やってみよう」と思い、日本版画院展に50号の作品「店蔵（みせぐら）」を出展しましたら、それが入選しちゃって。大騒ぎになって、それで火がついて、もう版画が面白くて、面白くて。どんどんいろいろなことに挑戦するようになったんです。

——ジュディさんの作品の題材は、お花と建物が多いですね。

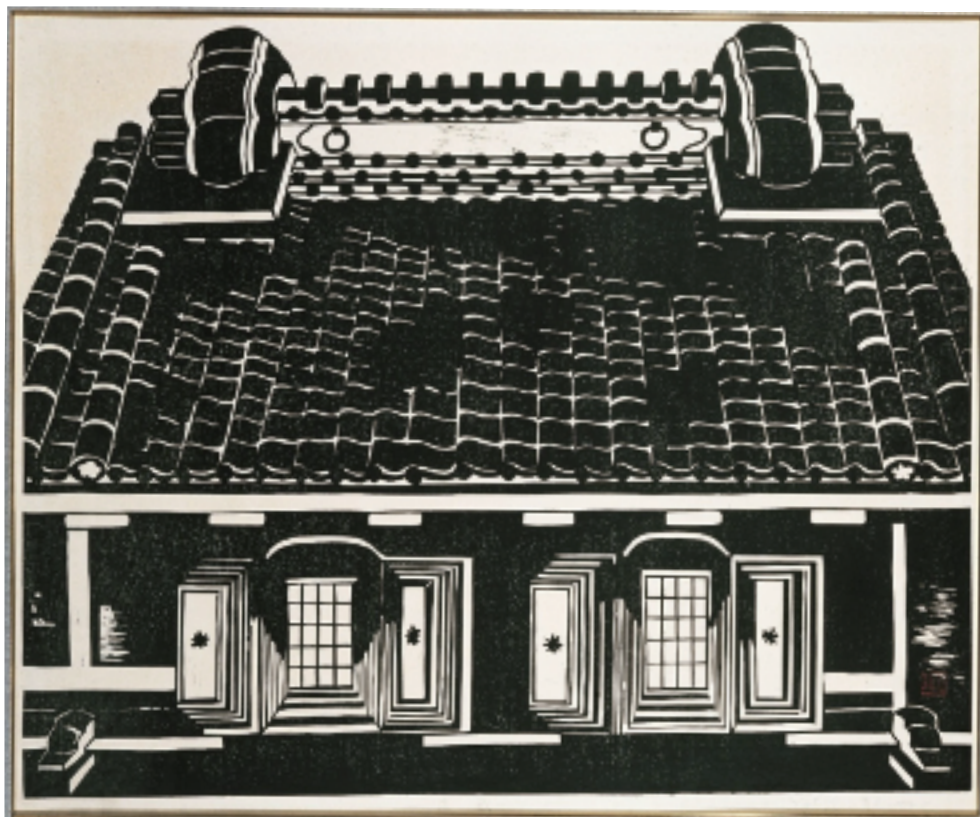
ジュディ・オングさん 私の兄の翁祖模は建築家なので、どこかで繋がっているのだと思いますね。兄の作った高雄市の流行音楽中心の建物は最近のBRUTUS誌2023年5月号の台湾特集のトップ

でも紹介されたように、今は高雄のアイコンとしてクローズアップされていて、それを見に高雄に旅行される方もたくさんおられるそうなのですよ。

ただ私自身はというと、特に日本家屋に思い入れがあります。「めいめいちゃん」と呼ばれていた子供時代に、お隣のお友達の家のお部屋で、ちゃぶ台でおせんべいとジュースをごちそうになった時のような楽しくて懐かしい、いい思い出がたくさんあります。

その後は京都で時代劇を撮影しながら、日本家屋に囲まれているうちに、ますますもって「日本家屋って素敵ね」と思うようになっていた時に版画を始めたので、大きい作品は、柱がしっかり立っていて、畳が綺麗に積まれた日本家屋がいいなって。私の性格にピッタリですよ。

そのうちに日本家屋がもっともっと好きになりました。日本家屋の設計をなさる先生方にご案内いただいて京都の「清流亭」を見に行き「雨過苔清（うかたいせい）」を制作しました。



©HEEMORY

「店蔵」



©HEEMORY

「雨過苔清」

——この作品を初めて見た時、版画と思えなかったです。透明感があって、シーンとした中に爽やかな風を感じるといいますか。

ジュディ・オングさん ありがとうございます。すごく考えて作った作品です。スケッチに行つて、写真をたくさん撮って、まだ記憶が新しいうちに急いで下絵を描きました。この時は6月で、ちょうど部屋のふすまを全部取り払って、透明な御簾にかけ替える時期だったんです。御簾にすることによって見た目の涼しさを出すというのは、四季を楽しむ日本文化の素晴らしいところですが、それを見た時に、「うわぁなんて涼しい！」と感じました。実際には風が来ていないのに、風が来ている気持ちになった様子を描きたいと思ったんです。ちょうど部屋に入ってきた目線で、部屋の中の塗りの机に庭が映っているのが、また涼しそうに見えました。

油絵にも、水彩画にも、日本画にもいろいろな表現方法がありますが、本当は版画って平面が多いんです。遠近とか立体といった表現がな

いのですよ。でも私、「どうして? いいじゃないですか別に」って思って、私なりの描き方をするようになったところから作品が変わりましたね。

## 版画展のみどころ

——今回の展示作品の鑑賞ポイントを教えてください。

ジュディ・オングさん 私は、台湾の風景ももちろん描いているのですが、やはり長く日本にいるので、京都や名古屋等日本の綺麗なところを色々描いています。私の版画は、白黒の作品から始まって、影になるグレーに出会ってから、絵がパッと変わります。その後、ちょっと色を入れてみたくなりました。でも、全部の色を入れるのではないのです。あくまでも白黒が主体で、そこに最少の色だけを使って、どうやって見る人に最大の色・全ての色を見てもらうかが、私の今日に至るまでの挑戦なのです。

それに、昨日と同じことはやりたくないとい



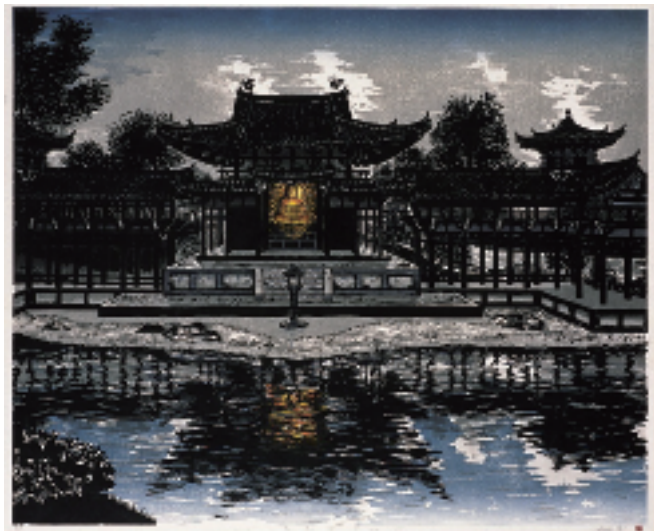
う思いがありまして。ある日、反射というものに目覚めました。名古屋にある古川爲三郎記念館には、素晴らしい数寄屋造りの大きなガラス戸があります。そこに反射したお庭が映っていて、その反射によって、ひとつの空間ができていたのです。これを表現したいと思ひまして、

どうやって表現しようか、だいぶ考えました。それが「華堂初夏（かどうしょか）」という作品です。その次には艶やかな反射というものを表現したくなりました。水の表現です。それが平等院を描いた「鳳凰迎祥（ほうおうげいしょう）」という作品になります。建物が前の庭に池に映っ



©HEEMORY

「華堂初夏」



©HEEMORY

「鳳凰迎祥」



©HEEMORY

「紅樓依緑」

て揺れているのが風（の表現）になるのです。こうした反射を利用して、揺れた水面で風、雰囲気や香り等を表現したいと思って描きました。

日展で特選をいただいた作品の「紅樓依緑（こうろういりよく）」で描いた反射は、打ち水です。お客様をお迎えするために打ち水をした黒い石を表現するのは反射しかないんです。ここでは黄色のランタンが下に反射していることによって、打ち水をしたところを表現しました。

こうした表現方法によって、日本文化の作品の中に自分が入っていく、色々な意味での空想の日本の旅をしていただけるようにしたいと思っています。

——日本に観光にいられてこういう家屋を見たことのある台湾の方は、多分、あーっ！日本で出会った景色だ、と思われるでしょうし、この作品を見て日本に行ってみたい、と思う方がたくさん現れることを期待しております。また、ジュディさんが表現された版画にある原風景を我々日本人がちゃんと残していけないといけないと強く思いました。

ジュディ・オングさん ありがとうございます。私も日本家屋という美しい芸術がこれからも残り続けることを切に祈っております。今回の版画展はこれまで展示した作品の他にも新しい作品もあります。

それから、今回は1つ面白い企画があるのですが、私の作品を着物にしました。台湾で初めて皆さんに見ていただきます。私の版画は着物になるっておっしゃった京都の着物会社の方にご提案いただいて、絹の布地にロウケツ染めで何度も何度も染めて作り上げた「鳳凰迎祥（ほうおうげいしょう）」と「紅樓依緑（こうろういりよく）」の着物を展示します。初めての方にも、もう一度見たいと言って下さる方にも楽しんでいただけたらと思います。

——それはとても楽しみです。11月18日からの展示会、ご成功を心からお祈りしております。本日はありがとうございました。

ジュディ・オングさんの版画展、「無限II 倩玉的版画世界」の参観にあたっての詳細情報は以下のとおりです。たくさんの方のご来場をお待ちしております。

期 間：2023年11月18日（土）～12月17日（日）

会 場：台南市美術館 1館 展示室A+ ワークショップ（台南市中西区南門路37号）

入場料：無料

関連サイト：URL「無限II 倩玉的版画世界」台南市美術館1館 告知映像— YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=RMQZWdcIR2Q>